

昭和66年2月1日第3種郵便物認可  
平成17年11月1日発行（毎月1回）1日発行  
俳句雑誌 沖 第36巻第11号



俳句雑誌[おき]

11月号

沖 発行所

# 火の勢ひ

能村 研三

## パレスホテルの思い出

待望の「沖」三十五周年記念号が刊行された。私が主宰に就任してから始めての記念号で、その内容も編集部が創意工夫をこらしてくれたので立派な内容となった。今回は、私の希望もあって、三十五年間の年譜を別冊としてつけたが、これをインデックスとして活用し、古い「沖」の内容をもう一度見直してほしいものである。創刊号からの「沖」は俳句文学館と市川市の図書館にしっかりと保存されているので、何かの機会に見ていただければ幸いである。俳壇の方々からも、この記念号に対して大きな反響が寄せられ、温かいメッセージにしばし酔いしれることができた。

草々の微光を浴びて蛇穴に  
風涼し「ご恩廻し」といふ言葉  
平穏といふまどろみに水を打つ  
相輪に笛の音渡る薪能

三十五周年のもう一つのイベントである記念大会もいよいよ近づいてきた。こちらの方も、実行委員会の方々の献身的な努力によって当日を迎えるばかりだったが、今度の会

洗ひあぐ顔に纏へる風の色

はじめみを噛みて改革企てり

秋天へ棒高跳びの身が撓ふ

小高きに對に点りし烏瓜

威銃開き直りの鳥ばかり

夕風や船を焚きたる火の勢ひ

場となるパレスホテルは、ちょうど二十五年前の創刊十周年の記念大会を開催した場所で、その当時の写真を見て懐かしく思った。先師登四郎は六十九歳で、一番充実していた時期でもあったように思えた。長女的美緒が花束をあげている写真も出てきたがまだ三歳になる前で、時の流れの早さに感慨にふけるものがあった。

今回は周年大会の二度目の会場となるパレスホテルであるが、この頃の気持をもう一度思い起こしながら「沖」の原点を見つめなおしてみることが必要であるようだ。

能村 研三



# 揺れて揺れて

林 翔

## 重力と風力と

わが家の庭には藤棚があるから、毎年藤の咲く頃には藤の句が生まれるのだが、今年詠んだ句は以外に反響を呼んだ。「俳句研究」7月号に発表した10句の中の

重力にすこし風力藤さかり

の句であるが、今日(9月16日)現在で、七誌が取り上げて鑑賞して下さっている。「麓」「斧」(以上は8月号)、「春耕」「春嶺」「麓」「雲取」「天塚」(以上は9月号)の諸誌であるが、〈重力〉〈風力〉などという、あまり俳句には使われない言葉、特に〈重力〉は物理学用語なのに、それを用いて成功した点を評価されたようである。(「麓」は筆者を替えて再録) 一般的には科学用語を俳句に用いるのは成功しにくいものだが、この句の場合は〈重力〉〈風力〉の間にへすこし〉が用いてあり、それがよいとの指摘もあった。

一例として「春耕」の池内けい吾氏の評文の一部を紹介する。

掲句は、満開の藤の花房を力学的考察に基づいて写生した作品。垂直に動いて重さの原因となる力すなわち「重力」によって藤房は垂れていく。そこへ「風力」が加わること

木馬揺れ児が揺れ萩も風に揺れ

青に揺れ紫に揺れ葡萄熟る

月を待つ 仄紅 仄白 すすきの穂

道すがら摘みし菊ぞと手向けける

うすき薄き鋸<sup>のこ</sup>挽く音か残る虫

右へ左へ秒速いかに蜷蝶

鴨の森名知らぬ鳥の声まじへ

不眠の吾を威すか暁の威し銃

燈下親し静かにルーペ横たはり

今日逝きし御霊名月に遊ぶかも

九月十八日大森輝男氏逝去



林 翔

で、藤房は左右あるいは前後に揺れる。「すこし」だから決して大揺れではない。花をより美しく見せるような、程よい揺れ方である。「重力にすこし風力」の「すこし」が、一句の隠し味のような効果を發揮している。

(以上)

池内氏をはじめ、それぞれの評者に感謝したい。

# 蒼茫集



花 氷

富岡 夜詩彦

いのち閉ぢ込められあはれ花水  
雲の峰よりいま着きしリフトかな  
夜半の点滴台風北上しつつあり  
癒えて立つ露草かくも美しき  
鳴く蟬にあと幾日のこの山河  
死者を訪ひ病むを慰めはや晩夏

色なき風

湯橋 喜美

百合を抱く力加へぬやうに抱く  
目に追ひしのみに秋蝶逸らせつ  
文弱や色なき風に押されぬる  
吹かれきて蟻すぐに這ふ夕野分  
風に乗り明らか運動会の楽  
月明り榎の梢のそよぎをり

琴の爪

柴田 雪路

白桃のかたさの程に子の拗ねる  
底紅やけふ為すことの有りてこそ  
蝸やはたと杼の憶む絹の里  
煩惱のいろほのと泛く酔芙蓉  
新涼の小函に鳴らす琴の爪  
櫃満たす人のぬくみの今年米

賢治の忌

大畑 善昭

日程表びつしりの八月を消す  
ふしぐろせんをう親戚へ山を越え  
何が嫌ひといへば蝶螺の腹の色  
庭師しづかに蜂の巢のあるを言ふ  
露宿す草々に空賢治の忌  
すいつちよが来て眠るなよ眠るなよ

# 潮鳴集



雁の列

藤井みち子

月明のこれより姨捨山のみち  
先立つる頸熱からむ雁の列  
スカートの襷よりたちてしじみ蝶  
畑桃を啜る大地にしたたらせ  
遺影やや若くありしよ秋燕

蛇 口

福嶋千代子

秋水の蛇口たのしき朝となる  
あまき香の稲穂手に受く峡日和  
道の端をゆつくり歩み秋高し  
きのふより今日の川幅秋出水  
灯を消せば手の残像の覚えて秋

蓼 虫 も

栃内和江

みちのくの夕日眩しと下り鮎  
ひたぶるに師系はひとつ蓼虫も

晩年の影をみじかく葉掘る  
吾亦紅とくに濁点句読点  
芋の露ぼろりと大地ひきしむる

白 布

うまきいつこ

永眠の睫翳れり秋燈下  
月さして白布に隔つははの顔  
逝くははへせめて花道天の川  
薬袋のあまた遺され秋暑し  
天上に父母再会の彼岸花

風は秋

渡辺輝子

玉の汗いとほしむかにチェロ奏者  
水晶体入れ替へみれば風は秋  
秋雲の白をまぶしみ点眼す  
秋の蟬ちちそれ以後は風さらふ  
大海を渡るがごとし望の月

# 沖作品



からすうりの花月光の端摺む  
風道のまた鮮しく竹を伐る  
勾玉に秋声とほる穴ひとつ  
夕映えに黄炎尽す泡立草  
葛原のもつれに風の波立てり  
なみなみと月光積みて無蓋貨車  
名を忘れ名を思ひ出し草の花  
ひとむらの草のふくらむ虫時雨  
雲は山に影おとしゆく夏の果  
爽やかな一重瞼とおもひけり  
むき出しの暑さくらへり丸ノ内  
画架低く据ゑて晩夏の運河べり  
白靴に朝の草の香子よ癒えよ  
蝉の羽化見てをり声を得つつあり  
カルシウム摂らな七夕竹に雨

市川市

諸岡和子

埼玉

服部 早苗

東京

坂 ようこ

# 能村研三選

秋めくや日の斑の遊ぶ石畳  
やうやくに風立ちにけり夕木樞  
喪に籠るひと日よく鳴く夕かなかな  
登高やはるかに川の蛇行して  
庖丁に水垂直に当てて夏  
吊橋へらせんに登る涼しさよ  
大の字の足裏が捉ふ夜の秋  
飛込やふつと水面の窄みたる  
真つ先に長子の担ぐ今年米  
無住寺も山の風入れ盆支度  
凌霄や袋小路も風の道  
夜の秋最終電車の音確か  
白木樞質屋廃業してゐたり  
飛び石はをみなの歩幅こぼれ萩  
半年の資産繰り表燕去る

市川市

栗原 公子

千葉

鈴掛 穂

東京

高木 嘉久

蚩籠のぞく眼の濡れてをり  
新じやがの届いてゐたる総務二課  
林 昭太郎

火の如き蠲を置き木の老ゆる  
南瓜切る女の身体刃にあづけ  
秋めくやタイルのまもる正方形  
螢の夜閉ぢては開く星座表  
東京 工藤 進

炎昼の水を練りをる鯉の鱗  
アコーデオンの晩夏の夜気を震はせて  
手型に手嵌めて隙ある残暑かな  
蛇口より終の一滴銀河濃し  
向日葵や目覚し時計鳴り通し  
キャンプファイア火の粉にもある翼かな  
中尾 公彦

炎帝のために下げ置く大草鞋  
神木に配信されし蟬の声  
看取る辺に月光軋みあたりけり  
延長戦制し球児の夏了る  
紫蘇の実の逆さなでして一掴み  
岩手 栗城 静子

夕さりのいくつつ灯して地蔵盆  
かなかなや円の傾きて童話村  
鹿踊跳んで秋風定まれり  
角笛の山の彼方に吾亦紅  
長崎 吉武 美子

くくり根の湿り解きぬ月見豆  
水澄むや母の淀みをひと掬ひ  
曼珠沙華吾を忘れし母を恋ふ  
盆路の草漂着す吾妻橋  
千葉 安藤しおん

梨剥いて風説追はぬ路地ぐらし  
地球水にほころび易きつづれさせ  
遠嶺晴れて渾身の艶唐辛子  
青胡桃夜目にも雲の流れをり  
新潟 長谷川 春  
土用芽や僧に得度の子が二人  
ねぢくれてこそ本格派山の薯  
はづしたる眼鏡にもある秋思かな  
げんこつにてつぺんありぬ雲の峰  
千葉 篠藤千佳子  
青葡萄屈託のなき乱反射  
木洩れ日にそよぐ手話の手涼しかり

### 新人賞予選句（十月）

勾玉に秋声とほる穴ひとつ  
諸岡 和子  
なみなみと月光積みて無蓋貨車  
服部 早苗  
むき出しの暑さくらへり丸ノ内  
坂 ようこ  
庖丁に水垂直に当てて夏  
栗原 公子  
飛込やふつと水面の窄みたる  
鈴掛 穂  
飛び石はをみな歩幅こぼれ萩  
高木 嘉久  
火の如き蠲を置き木の老ゆる  
林 昭太郎  
アコーデオンの晩夏の夜気を震はせて  
工藤 進  
キャンプファイア火の粉にもある翼かな  
中尾 公彦  
紫蘇の実の逆さなでして一掴み  
栗城 静子

# 沖作品 選後句評

\*  
能村研三

勾玉に秋声とほる穴ひとつ 諸岡 和子

勾玉の歴史は古く、縄文時代から使われていた。ほとんどが翡翠で出来ていて、勾玉を持つことで女性は心身共に美しくなれると願い、男性は戦いのお守りでもあった。その形も胎児を模したものであるとか、三日月を模したものであるとか、いろいろな説があるが、勾玉のもつ美しい曲線は様々な想像をかき立てられる。そして、身につけるために必ず小さな穴があいているが、作者はその穴を通るときに発する響きこそが秋声ではないかと思った。とにかく、それを身につけることで、何かを信じ、不思議な力がさずかるように思えたのである。諸岡さんは、私が指導していた公民館のグループ句会の一人であるが、最近では多くの句会に参加して揉まれているのでめきめき腕を上げてきた。

なみなみと月光積みて無蓋貨車 服部 早苗

服部さんも、夏あたりから中央例会や東京句会に出席され、好成绩を収められている方で、「俳句研究賞」の候補作品にも上位で選ばれた人である。掲出の句も、句会で成績のよかった句である。最近では高速道路の発達により物流はトラック運送に主流が移ってしまったが、鉄道貨物も一時に大量の物資が運べる強みも持っている。無蓋貨車というのは、覆いのない荷台だけの貨車であるが、何十両という貨車を連結したものが、月光が降り注ぐ広野を走り過ぎていった。詩的な構成のある句である。

むき出しの暑さくらへり丸の内 坂 ようこ

丸の内は東京駅の皇居側にあるビジネス街で、最近では丸ビルが新しくなったり、再開発で街の様相も一変してきた。一流企業の本社ビルがあるためか、ここに通う人々もネクタイにスーツ姿がビシッと決まっているが、アスファルトとコンクリートで固められた都市空間であるので、何か息苦しく感じざるを得ない。夏などは、太陽が直接路面を照りつけ、地下街から地上に出たときなどは、逃げ場もなく正に「むき出しの暑さ」に對峙せざるを得ない。場所が丸の内だけにこの発想はおもしろい。

(以下略)